



欽討彙根新

六

~ 13
3325
6



3325  
6



夫の甚き花  
林の野菊



秋討彦根城巻之六



目録

あつたあひのくまのきこくであいせうが

一 夏田姉川榎原お合持原の事

長谷田大八榎原の事

あつたあひのくまのきこくであいせうが

一 夏田姉川石合系助之進及子左衛門の事



大正十年八月九日寄  
本大學出版部贈



歌討度根咄巻之六

あしたあひるをのまきしうであいせうぶ

夏田坪川 榎東出合務夜の事

あしご 高田大八 榎山を渡る事

あき 明きはと徳四年八月十日の細坪川 あきあひるを

七郎左衛門が自ら教上り八段余り人 あきあひるを

伊沢た直お七九郎山田庄屋を多水 あきあひるを

幣一ヶ米百の人数を吹く於合百粒 あきあひるを



縁の國の産めてはらぐ六七年（元）以糸ゆく  
あつて 三の 高田らうらうらうらうらうら  
友の傳りちうく 終て 付もたれうく  
を今も人 赤坂在八部と 中名と三人  
P 念せ 赤坂 赤坂 赤坂 将を業と  
さうく 年月を送りうらと 赤坂 赤坂 赤坂  
十九日 赤坂も 三人を 中名 赤坂 赤坂  
おれらうらうらをりうらうら 赤坂 赤坂

婦川かへく 向今也 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
おそく 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂  
か 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂 赤坂  
一  
は 赤坂  
の 赤坂  
わ 赤坂  
ら 赤坂

あつて三人ともあつてもいふを  
合ふの夜は神くあびりつらさう  
多ち白ち三人ともは脚一節どの  
生神まろぐおも首を削らまぐ  
まき若のともは血をりつてあま  
あま一帯を脚けつらさうのとも  
まき合ふまををりつて夕暮をり  
しりうらうらうらうらうらうら  
あま若りつのはま

うねりしつらさうのとも三人  
し若のともは今日あまのまき合  
ま及むらうらうらうらうら  
こは馬あまのまきうらうら  
あまあまあまあまあまあま  
りのとあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあま



うま形うまねはあんなに口をよそく  
あつて こころ さそ これら をいふ  
而をえ念をなく あま りど 早 難 物  
きこものなき ま う て は 全 件 状 音  
と死を修う た む ふ く 左 果 死  
ぞし ま ま に 伺 め て は 世 も 此 事  
入 り き り 申 さ う う と て 家 く  
こわらう を 家 ま う う 海 を ど う う  
ば を ど う う ま い き や い ら い き  
つ ま さ く ま さ く ま さ く

形 ひ あ よ う ま ま に び り ま く と ま て あ ん 死  
よき ち が い を し と す う を 申 之 進  
あ お ト と ら を ね り と ま で 思 ひ  
ま ま ま に あ ど て 往 着 せ が  
ら こ し や 今 日 の 今 よ 知 り し 謝 ひ ん  
き こ と 心 も き く あ ら は あ ん の 法  
カ ち を 傍 り し て 四 極 分 の 心 佈 き  
形 ち の 入 ら と ア ク ね は あ ん の 心 ひ ま



うろとびうろとび旦今たまうろとび家来サライ子この  
ついでついで他人たみしの脚すけを口くちとはPペ多タ一イチお  
りふりりふりきりりのも〜〜〜  
日ひ比ひの思し恩ん教きょうずず〜とつつきよ  
ろとふろとふちんちんかろかろの中なかを彩母さいも〜お  
物もの〜婦川ふせ〜ももおお信しん〜  
ころころきき〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
高たか〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
知ちひを

りよりよ少すくに仰おほきれは世よ付つる田でん婦川ふせを  
〜Pペ多タ一イチおお〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
と心こころ家来サライの内うち〜と〜と仕し以いせをP  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
水みづの〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
それそれを〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
もろ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

河平たあはるるとうい 十代のしやーまなぞ  
夏田婦川を合兵助之進女子を初め年

のころありし七郎を其の家の來のころ  
は依後權を其のちを係百を係とてつづ  
まもちやうや其の侍より進もめて  
つづは今日も進つ切死するも後死  
よ中りも忠死の屋の因せしころは  
まて其の節よ其のあはれくまを  
て其のあはれをいふ人の有りし其のし

と口を捲てつづめれば夏田を  
山の上より其を見えて十代首のたふ  
るを切て其をばつや白くは  
とも其のつづを其のあはれ  
まへに倒れ死すその時よの希  
切落して夏田助を近同助一節表  
意め其のあはれを其のあはれ  
本林お其のあはれを其のあはれ

むくは婦川あひまがくうも七郎しちろうなるの  
依よ七郎しちろうをこしまら伊波いばを直ただねむ先  
郎らう山田やまだ屋や多た主ぬし知ち多た多たの泉いづみ集あつ芸ぎ  
面おもてくくののくくををたたづづままつつててままむむ  
い多おほ泉いづみああ中のなかののよよままののままでもでも一ひと匹びつもも引ひ  
込こ入い込これれぬぬちち知ちををちちららししてておお知ちふふ時とき  
七郎しちろうたた馬うまののきき脚あし之の進しんととこころろうう余あま  
人ひとままももせせにに切きむむすすぶぶ脚あし一ひと郎らうハハ依よ七

をを目めををくく進しん馬うまくくをを伊波いばをを直ただねね脚あし  
けけままれれはは依よ七郎しちろうももままててくく一ひと匹びつ  
人ひと踏ふままいいりり脚あし市いちとと後あとをを合あ守まもりりをを  
とときき山田やまだ屋や多た主ぬし知ち多た多たの泉いづみ集あつ芸ぎ  
依よ七郎しちろうののたたちちままととつつくく筋すぢををふふせせ  
きき勤ちん心しん者しや多たりり一ひと人にんたたはは伊波いばをを直ただねね脚あし  
物ものははちちりり多た多た多たの泉いづみ集あつ芸ぎ脚あし十じゅう三さん三さん三さん  
ハハああままののももここののとととと依よ七郎しちろうハハくくけけままりり





らうらう不ふ下げ依よ七しちの助すけ一いち部ぶは室むろのままら  
まあやう老らうきき仰おほよよそそくくななはは底そこをを是こゝ  
をを見みててししどどああららううとと後うしをを扱あ  
すすてて口くちをを扱あてて助すけ一いち部ぶががうう一いち部ぶ  
うう切きててめめらられれにに依よ七しちああららううびび毛け  
よよ力ちからをを治ちてて助すけ一いち部ぶをを中ちゆうよよそそも  
ここててつつままううららううののととたた助すけ市しちも  
口くちををううららうう切きてて治ちぶぶのの口くちののままららう

原はら抄しやう揚やうよよそそもも一いち部ぶはは時ときちち年ねんよりより揚やう  
アア一いち部ぶ一いち部ぶのの業わざののちちりりそそもも一いち部ぶ  
とと助すけのの助すけ一いち部ぶききりりいい底そこをを上かみにに作つく  
るる山やま田たもも初はつ術じゆつ足あしのの曲まがりりののままららうう  
とともも助すけ市しちののままららううとともも一いち部ぶをを更さら  
換かへへととままららうう一いち部ぶののままららうう  
市しちののままららうう切きてて治ちぶぶののままららうう  
ままららうう切きてて治ちぶぶののままららうう一いち部ぶののままららうう

て残を捨て 出あはと紙を馬市  
まうきば 花の七がうし紙の  
看先より 大塚長子 抄録す 又  
若田と 杉野い あま 互ひし 秘訣を  
とて 紙おと 紙よ 小若の 中  
と 紙ひちがう 残の 右を 又 抄録  
か 若の ありを 考ふる 小若の 抄録  
七九節 ありを 考ふる 小若の 抄録

三と ころ 残す 大八 とうき 紙  
うら 切倒し 首を 考ふる 抄録  
このとき 中紙を 考ふる 抄録  
うら 考ふる 抄録  
小若の 抄録  
師が 考ふる 抄録  
まは 考ふる 抄録  
小若の 抄録





るくしつ落しおちよりうさやまのよも信徳しんとくの馬うま  
市いちも老ろう而にの痛いたみよ御ごきぎぐぐ  
馬うま者ものよどああとと所ところすすとと依よをを七しち節せつ  
た書たの附つけみみくく何なにももくくそそをを社しゃ留りゅうけ  
てこの付つけ師し川がわか家け来らいどもどもの進しんくくよ  
いあいくくをを集あつめめるる房ふ田たか家け来らいの脚あしくく  
おおももろろくくとと一いつ回かいももををゆゆげげててうう依よ  
ここびびたたれれどもども七しち節せつたたままののいいままもも依よせせ多た

か付かわわるるりりよよ力ちからをを落おししててままくく  
よよんん形かたちををままととららせせ引ひききくくののいいままもも  
の事こと四し方ほうくく吸ひくくたたれれはは馬うま寄よりり帯おびのの  
ハ組くみ子こをを引ひ具ぐ一いつ早はや馬うまああてて来きりり  
ああれれどもども室むろををやや切きりりににゆゆりりににゆゆりり  
ちちろろろろたたれれはは名な田た又また子こああがが危あぶ難なああをを  
見み合あいいししててううれれををままりりににままりりににままりり  
とと他ほかくくたたまま幸さいたた書しよののももおお来きりりとと

やどしすけ 存者即一部が中至一始終を述  
て料の一刺を多持し古河一後  
田父子ら危難ハ幸た其の終ひを至  
そを引とり古河が善の持不く違  
新しど終よ管らりおしむき  
や後田父子の忠貞極矣のりの  
うりよ其曲所其の師川が為し  
格免を違り事一夫運の志

まむろとと終りや 幾言なり  
事どもしうり其後 執事と殿作もさね  
うらひはあの一併ハ始終ともよ士郎  
た其のが権威しあうり 在道めい事  
方重く 所為の初りなりこれ  
よ後々 終りをも没収すききの事  
師川の信印 殊よ由緒のり家  
お絶なり 新事すし けりその





顔かほ心こころ事ことりりめとと上うへららののああななののよよく  
 夫おとこ八はち郎らうをを心こころ責せめめるる所ところにに張はりり  
 留とどまますす所ところににああららるる所ところににああららるる  
 一いっ部ぶがが智ち化けのの法ほうににああららるる  
 事ことににああららるる事ことににああららるる  
 子こ膳ぜんをを修しゆりりししととちち孝かうととままままりり  
 子こ考かうるる所ところににああららるる所ところににああららるる  
 此こゝををああららるる所ところににああららるる所ところににああららるる

夫おとこ向むか父ちち子こがが廟ぼうををああららるる所ところににああららるる  
 此こゝををああららるる所ところににああららるる所ところににああららるる  
 夫おとこももううととああららるる所ところににああららるる



新あらた村むら彦ひこ根ね新あらた卷まき之の六む年ねん

